

# 若菜集

島崎藤村

青空文庫



こゝろなきうたのしらべは  
ひとふさのぶだうのごとし  
なさけあるてにもつまれて  
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる  
むらさきのそれにあらねど  
こゝろあるひとのなさけに  
かけにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり  
あぢはひもいろもあさくて  
おほかたはかみてすつべき  
うたゝねのゆめのそらごと

一 秋の思

秋

秋は来ぬき

## 秋は来ぬ

ひとは  
一葉は花は露ありて

風の来て弾く琴の音に

青き葡萄は紫の

自然の酒とかはりけり

## 秋は来ぬ

## 秋は来ぬ

おくれさきだつ秋草も

みな夕霜のおきどころ

笑ひの酒を悲みの

盃さかづきにこそつぐべけれ

秋は来ぬ

秋は来ぬ

くさきも紅葉もみぢするものを

たれかは秋に酔はざらぬ

智恵ちえあり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはむ

初恋

まだあげ初めしそ前髪まへがみの  
 林檎りんごのもとに見えしとき  
 前にさしたる花はな櫛くしの  
 花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは  
うすくれなあ

薄うす紅あかの秋あきの実みに

人ひとこひ初めそしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき

たのしき恋の盃さかづきを

君なが情さに酌けみしかな

林檎畑の樹この下に

おのづからなる細道ほそみちは

誰たが踏みそめしかたみぞと

問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の

人なきときに夜よるいでて

秋の葡萄の樹の影に

しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども

君は葡萄にあらねども

人しれずこそ忍びいで

君をぬすめる吾わが心

髪を洗へば

髪を洗へば紫の

をくさ

小草のまへに色みえて

はなとり

足をあぐれば花鳥の

したが

われに随ふ風情あり

ふせい

目にながむれば彩雲の

あやぐも

まきてはひらく絵巻物

えまきもの

手にとる酒は美酒の

うまざけ

若き愁をたふめり

うれひ

耳をたつればうたがみ歌神の

きたりて玉たまの簫ふえを吹き

口をひらけばうたびとの  
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも

熱きこゝろのわれなれど

われをし君のこひしたふ

その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀こほろぎの

風にさそはれ鳴くごとく

あさかげきよ

はなぐさ

朝影清き花草に

惜しき涙をそぐらむ

それかきならず玉琴たまごことの

一つの糸のさはりさへ

君がこゝろにかぎりなき

しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは触れやすき

君が優しき心もて

かくばかりなる吾わがこひに  
触れたまはぬぞ恨うらみなる

傘かさのうち

ふたり  
二人してさす一ひと張はりの

傘に姿をつゝむとも

情なさけの雨のふりしきり

かわく間まもなきたもとかな

顔と顔をうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅花ばいかの油くろかみ黒髪くろかみの

乱にほれて匂にほふ傘にほのうち

恋ひとあめの一ひとあめ雨ひとあめぬれまさり

ぬれてこひしき夢まの間まや

染めてぞ燃ゆる紅絹もみうらの

雨あめになやめる足あしまとひ

歌ふをきけば梅川よ

しばし情なさけを捨てよかし

いづこも恋たはぶに戯れて

それ忠兵衛ちゆうべえの夢がたり

こひしき雨よふらばふれ

秋の入口の照りそひて

傘の涙を乾ほさぬ間まに

手に手をとりにて行きて帰らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の

おのづからなる時くれば

一もと花の暮陰ゆふぐれに

秋かくに隠れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥あきどりの

声にもれくる一ふしを

知るや君

深くも澄すめる朝潮あさしほの  
底にかくるゝ真しらたま珠を

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に  
静しづかにうごく星くづを

知るや君

まだ弾ひきも見ぬをとめこの  
胸ねにひそめる琴の音を

知るや君

秋風の歌

さびしきはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲しらくもの

飛びて行くへも見ゆるかな

暮影ゆふかげ高く秋は黄の

桐きりこずゑの梢の琴ねの音に

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり

ゆふべ西にしかぜ風吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り

あさ秋風の吹きよせて

ゆふべの鶉うづら巢かくに隠る

ふりさけ見れば青山あをやまも

色はもみぢに染めかへて

霜葉しもばをかへす秋風の

空そらの明鏡かがみにあらはれぬ

清すずしいかなや西風の

まづ秋の葉を吹けるとき

さびしいかなや秋風の

かのもみぢ葉ばにきたるとき

道を伝ふる婆羅門ばらもんの

西に東に散るごとく

吹き漂蕩す秋風に  
ただよは  
ひるがへ 飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷺鷹の  
あさば  
あけくれそら 明 闇天をゆくごとく

いたくも吹ける秋風の  
はね  
は 羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の  
こ  
 山の木の葉をはらふとき

悲しいかなや秋風の

秋の百葉ももはを落すとき

人は利劍つるぎを振ふるへども

げにかぞふればかぎりあり

舌は時世ときよをのゝしるも

声はたちまち滅ぶめり

高はげくも烈はげし野も山も

息吹いぶきまどはす秋風よ

世をかれ／＼となすまでは

吹きも休やむべきけはひなし

あゝうらさびしあめつち天地の

壺つぼの中なる秋の日や

落葉と共にひるがへ飄る

風ゆくへの行衛を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり

秋しゅうかいどう海棠の花を分け

空ながむれば行く雲の

更さらに秘密を聞ひらくかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに

ゆめみんとて

よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかには

しるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも

このつみゆゑ

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらき冥<sup>よみ</sup>府までも

かけりゆかん

しづかにてらせる

月のひかりの

などか絶間なく

ものおもはする

さやけきそのかけ

こゑはなくとも

みるひとの胸に

忍び入るなり

なさけは説とくとも

なさけをしらぬ

うきよのほかにも

朽くちゆくわがみ

あかさぬおもひと

この月かげと

いづれか声なき

いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶ちようと蜘蛛くも

小蜘蛛は花を守り顔まも

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもくすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば

小蝶の舞をいかにせむ

花は小蝶のためならば

小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども

つばさ  
羽翼も軽き小蝶こそ

いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其  
女の家を望み見てうたへるうた

誰かたれとゞめん旅人たびびとの

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらん旅人の

あすは別れと告げましを

清きよき恋とや片かたし貝がひ

われのみものを思ふより

恋はあふれて濁にごるとも

君に涙をかけましを

人ひとづま妻恋ふる悲しさを

君がなさけに知りもせば

せめてはわれを罪つみびと人と

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂うしや身は

くるしきこひの牢獄ひとやより  
罪の鞭責しもとをのがれいで  
こひて死ななんと思ふなり

誰たれかは花をたづねざる  
誰かは色彩いろに迷はざる  
誰かは前にさける見て  
花を摘つまんと思はざる

恋の花にも戯たはむるゝ  
嫉妬ねたみの蝶ちようの身ぞつらき

二つの羽はねもをれく〜て  
翼つばさの色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいや〜深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮はすさかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは

萩<sup>はぎ</sup>さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は来<sup>き</sup>て

わが踏む道に萩さけど

濁<sup>にご</sup>りて待てる吾恋<sup>わが</sup>は

清<sup>うらみ</sup>き怨となり<sup>に</sup>けり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひ

しそのうた

いざさらば

これをこの世のわかれぞと  
 のがれいでは住みなれし  
みてら御寺の蔵裏くりの白壁しらかべの  
 眼にもふたたび見ゆるかな

いざさらば

住めば仏のやどりさへ  
ほのほ火炎いへの宅いへとなるものを  
 なぐさめもなき心より

流れて落つる涙かな

いざさらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさけは熱くもゆる火の

こひしき塵ちりにわれは焼けなむ

二 六人の処女をとめ

おえふ

処女をとめぞ経へぬるおほかたの  
われは夢路ゆめぢを越えてけり  
わが世の坂にふりかへり  
いく山やま河かはをながむれば

水静みづしづかなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで

岸の桜の花影はなかげに

われは処女をとめとなりにつけり

都みやこどり鳥う浮く大川に

流れてそゝぐ川かはぞひ添ひの

白しろすみれ堇わかくささく若草わかぐさに

夢多かりし吾身わがかな

雲むらさきの九重ここのへの

大宮内につかへして  
せいりようでん  
 清涼殿の春の夜の  
よ  
 月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り  
ちりばなみ  
ほ

かすみ  
 霞をうかべ日をまねく

玉の台の欄干に  
うてな  
おぼしま

かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の  
かがや  
 耀くさまを目にも見て

ときめきたまふさま／＼の  
ひとりのころもの香かをかげり

きらめき初そむる 暁あかほし星の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天あまつみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名なの夕暮に消えて行く

秀<sup>ひい</sup>でし人の末路<sup>はて</sup>も見き

春しづかなる御園<sup>みそのふ</sup>生の

花に隠れて人を哭<sup>な</sup>き

秋のひかりの窓<sup>よ</sup>に倚り

夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて

大宮内の門<sup>かど</sup>を出<sup>い</sup>で

けふ江戸川に来て見れば

秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄しもはに落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や

流れゆく水静かにて

あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世をふ経れば

若き命いのちに堪へかねて

岸のほとりの草をし藉き

微笑ほほゑみて泣く吾身かな

## おきぬ

みそらをかけるあらわし猛鷲あつしの

人の処女をとめの身に落ちて

花の姿やどに宿やどかれば

風雨あらしに渴かわき雲うに饑うゑ

天あま翅かけるべき術すべをのみ

願ふ心のなかれとて

黒くろ髪かみ長ながき吾身われこそ

うまれながらの盲目めしひなれ

芙蓉ふようを前さきの身とすれば

涙なみだは秋の花の露

小琴をごとを前さきの身とすれば

愁うれひは細き糸の音

いま前さきの世は鷺の身の

処女つばさにあまる羽翼つばさかな

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき浅茅生あさぢふの

茂れる宿やどと思ひなし

身は術すべもなき蟋蟀こほろぎの

夜よるの野草のぐさにはひめぐり

たゞいたづらに音ねをたてて

うたをうたふと思ふかな

色いろにわが身をあたふれば

処女こゝろの鳥となり

恋に心をあたふれば

鳥の姿は処女こゝろにて

処女こゝろながらも空そらの鳥

猛あらし鷲わしながら人の身の

天あめと地つちとに迷ひゐる

身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮うしほさみしき荒磯あらいその

巖いはかげ陰われは生れけり

あしたゆふべの白駒しろこまと

故郷ふるさと遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと

われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき

この年までの処女をとめとは

うれひは深く手もたゆく

むすぼほれたるわが思おもひ

流れて熱あつきわがなみだ

やすむときなきわがこゝろ

乱みだれてものに狂ひよる  
心を笛の音ねに吹かん

笛をとる手は火にもえて  
うちふるひけり十とをの指

音ねにこそ渴かわけ口くちびる唇くちびるの  
笛たうを尋たうぬる風情ふせいあり

はげしく深きためいきに

笛の小竹をだけや曇るらん

髪は乱れて落つるとも  
まづ吹き入るゝ氣息いきを聴きけ

力をこめし一ふしに  
黄楊つげのさし櫛ぐし落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば

笛吹き洗ふわが涙

短き笛ふしの節まの間も

長き思おもひのなからずや

七つこころの情声を得て

音ねをこそきかめ歌神うたがみも

われ喜よろこびを吹くときは

鳥こずゑも梢ねに音をとゞめ

怒いかりをわれの吹くときは

瀬せを行く魚ふちも淵ふちにあり

われ<sup>かなしみ</sup>哀を吹くときは

獅子<sup>しし</sup>も涙をそゞぐらむ

われ<sup>たのしみ</sup>樂を吹くときは

虫も鳴く音<sup>ね</sup>をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは

流るゝ水のたち帰り

悪<sup>にくみ</sup>をわれの吹くときは

散り行く花も止りて とどま

よくおもひ  
慾の思を吹くときは

心の闇の響あり やみひびき

うたへ浮世の一ふしは うきよ

笛の夢路のものぐるひ

くるしむなかれ吾友よ わが

しばしは笛の音に帰れ ね

落つる涙をぬぐひきて  
静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出<sup>い</sup>で  
こゝの岸よりかの岸へ  
越えましものと来て見れば  
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて

やむよしもなき胸の火や  
 鬢びんの毛を吹く河風よ  
 せめてあはれと思へかし

河波かはなみ暗く瀬を早み

流れて巖いはに砕くだくるも

君を思へば絶間なき

恋の火炎ほのほに乾かわくべし

きのふの雨の小休をやみなく

水嵩みかさや高くまさるとも

よひくになくわがこひの  
 涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは

はなとり  
 花鳥の絵にあらじかし

かがみ  
 空鏡の印象砂の文字

梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは

をを  
 雄々しき君の手に触れて

ああくちべに  
 嗚呼口紅をその口に

君にうつきでやむべきや

恋は吾身の社やしろにて

君は社の神なれば

君の祭壇つくゑの上ならで

なにいのちを捧さげまし

砕くだかば砕かけ河波かはなみよ

われに命はあるものを

河波高く泳なぎ行き

ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も

吾身はすべて火炎なり  
ほのほ

思ひ乱れて嗚呼恋の

千筋ちすぢの髪かみの波なみに流るゝ

おつた

花灰ほの見ゆる春の夜の

すがたに似たる吾わがいのち命いのち

朧おぼろおぼろ々ちちははに父母ちちははは

二つの影と消えうせて

世に孤児みなしごの吾身こそ

影より出でし影なれや

たすけもあらぬ今は身は

若き聖ひじりに救はれて

人なつかしき前髪まへがみの

処女をとめとこそはなりにけれ

若き聖ひじりののたまはく

時をし待たむ君ならば

かの柿の実をとるなかれ

かくいひたまふうれしさに

ことしの秋もはや深し

まづその秋を見よやとて

聖に柿をすゝむれば

その口唇くちびるにふれたまひ

かくも色よき柿ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

人の命の惜をしからば

嗚呼ああかの酒を飲むなかれ

かくいひたまふうれしきに

酒なぐさめの一つなり

まづその春を見よやとて

聖に酒をすゝむれば

夢の心地に酔ひたまひ

かくも楽しき酒ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

道行き急ぐ君ならば

迷ひの歌をきくなかれ

かくいひたまふうれしさに

歌も心の姿なり

まづその声をきけやとて

一ふしうたひいでければ

聖は魂たまも酔ひたまひ

かくも楽しき歌ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

まことをさぐる吾身なり

道の迷まよひとなるなかれ

かくいひたまふうれしさに

なさけ情も道の一つなり

かゝる思おもひを見よやとて

わがこの胸に指ぎせば

聖は早く恋ひわたり

かくも楽しき恋ならば

などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく

ふと目に入るを手にとれば

雪より白き小石なり

若き聖ののたまはく

智恵の石とやこれぞこの

あまりに惜しき色なれば

人に隠して今も放たじ

はな

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかする

をとこのかたる

ことのはを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

びん  
鬢の毛を

つげ  
黄楊の小櫛に

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なんと

よみいでし

あつきなさは

誰<sup>た</sup>がうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋か名か

忠兵衛も名の

ために果つは

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容さよひめ姫は

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはぶれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

三 生のあけぼの

草枕

夕波くらく啼<sup>な</sup>く千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽<sup>はね</sup>をうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

若き心のひとすぢ筋に

なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて

とけて涙となりにつけり

蘆葉あしはを洗ふ白波の

流れて巖いはを出づること

思ひあまりて草枕

まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋ね侘<sup>たう</sup>び

道なき森に分け入りて

などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや

野末<sup>のずゑ</sup>に山に谷<sup>たにかげ</sup>蔭に

見るよしもなき朝夕の

光もなくて秋暮れぬ

おもひ  
想も薄く身も暗く

残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く  
水に涙の落つるかな

身を朝あさぐも雲にたとふれば

ゆふべの雲の雨となり

身を夕ゆふあめ雨にたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして

風に吹かれてひるがへ飄り

朝の黄雲きぐもにともなはれ

夜<sup>よる</sup>白河を越えてけり

道なき今の身なればか

われは道なき野を慕ひ

思ひ乱れてみちのくの

<sup>みやぎの</sup>宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿<sup>やど</sup>の宮城野よ

乱れて熱<sup>わが</sup>き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴ことき

悲み深き吾目には

色彩いろなき石も花と見き

あゝ孤ひとり独みの悲かな痛しを

味ひ知れる人ならで

誰たれにかたらん冬の日の

かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば

空冬雲に覆はれて

身にふりかゝる 玉たま霰あられ

袖そでの氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風つよ勁く

小川の水の薄氷

氷のしたに音するは

流れて海に行く水か

啼ないて羽風はかせもたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光もうすき寒さむぞら空の

汝なれも荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日

光もなくて暮れ行けば

人めも草も枯れはてて

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱

なにを酔ひ泣く忍び音ねに  
 声もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾ねひひきて

野末をかよふ人の子よ

声調しらべひく手も凍りはて

なに門かどづけの身はての果ぞ

やさしや年もうら若く

まだ初恋のまじりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて  
霜と霜との枯草の

道なき道をふみわけて

きたれば寒し冬の海

朝は海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>の石の上<sup>へ</sup>に

こしうちかけてふるさとの

都のかたを望めども

おとなふものは<sup>なみ</sup>濤<sup>なみ</sup>ばかり

暮はさみしき荒磯あらいその

うしほ潮を染めし砂に伏し

日の入るかたをながむれど  
わ湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の

岩に砕くだけて散れるとき

かなしいかなや冬の日の

うしほ潮とともに帰るとき

誰か波路を望み見て  
たれ

そのふるさとを慕はざる

誰か潮の行くを見て

この人の世を惜まざる  
をし

暦もあらぬ荒磯の  
こよみ

砂路にひとりさまよへば

みぞれまじりの雨雲の

落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音

慣れてさみしき吾耳に

怪しやもるゝものの音ねは

まだうらわかき野路の鳥

鳴呼あめづらしのしらべぞと

声のゆくへをたづぬれば

緑の羽はねもまだ弱はき

それも初音はつねうぐひすか鶯うぐひすの

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども

若菜の萌もえて色青き

こゝちこそすれ砂の上へに

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしとや思へばか

梅が香かぞする海の辺べに

磯辺おほいはに高き大巖いはの

うへにのぼりてながむれば

春やきぬらん東雲しののめの

潮しほの音ね遠とほき朝あぼらけ

春

一 たれかおもはむ

たれかおもはむうぐひすの

涙もこほる冬ふゆの日に

若わかき命いのちは春はるの夜よの

花はなにうつろふ夢ゆめの間まと

あゝよしさらば美酒うまざけに

うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに

春のすがたをとめくれば

たもとにほふ梅の花

あゝよしさらばこと琴のね音に

うたひあかさん春の夜を

二 あけぼの

くれなる  
紅細くたなびけたる

雲とならばやあけぼのの

雲とならばや

やみを出<sup>い</sup>でては光ある

空とならばやあけぼのの

空とならばや

春の光を彩<sup>いろど</sup>れる

水とならばやあけぼのの

水とならばや

鳩<sup>はと</sup>に履<sup>ふ</sup>まれてやはらかき

草とならばやあけぼのの

草とならばや

三 春は来ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音はつねやさしきうぐひすよ

こぞに別離わかれを告げよかし

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳こぞの冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく  
まづしくくらくひかりなく  
みにくくおもくちからなく  
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草よ  
にひぐさ  
とほき野面のもせを画えがけかし

さきては紅あかき春はる花ばなよ  
樹きぎ々の梢こずえを染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞かすみよ雲ゆるよ動うごきいで

氷れる空をあたくめよ

花かの香かおくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

## 春はきぬ

春をよせくる朝汐あさしほよ

蘆あしの枯葉かれはを洗ひ去れ

霞に酔へる雛鶴ひなづるよ

若きあしたの空に飛べ

## 春はきぬ

## 春はきぬ

うれひの芹せりの根を絶えて

氷れるなみだ今いづこ

つもれる雪の消えうせて

けふの若菜と萌えよかし

四 眠れる春よ

ねむれる春ようらわかき

かたちをかくすことなかれ

たれこめてのみけふの日を

なべてのひとのすぐすまに

さめての春のすがたこそ

また夢のまの風情なれ

ねむげの春よさめよ春

さかしきひとのみざるまに

若紫の朝霞

かすみの袖をみにまとへ

はつねうれしきうぐひすの

鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春

ふゆのこほりにむすぼれし

ふるきゆめちをさめいでて

やなぎのいとのみだれがみ

うめのはなぐしさしそへて  
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春

あゆめばたにの早さわらびの

したもえいそぐな汝があしを

かたくもあげよあゆめ春

たえなるはるのいきを吹き

こぞめの梅の香ににほへ

五 うてや鼓

うてや鼓つづみの春の音

雪にうもるゝ冬の日の

かなしき夢はとぎされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこそめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とをぬふ糸は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかゞふことなかれ

はなさきにはふ蔭をこそ

春の台うてなといふべけれ

小蝶こちようよ花にたはぶれて

優しき夢をみては舞ひ

酔ゑふて羽袖はそでもひらくと

はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて  
ゆめしづか静なるはるの日の  
しらべを高く歌へかし

## 小詩

くめどつきせぬ  
わかみづを  
きみとくまゝし  
かのいづみ

かわきもしらぬ

わかみづを

きみとのまゝし

かのいづみ

かのわかみづと

みをなして

はるのこゝろに

わきいでん

かのわかみづと

みをなして

きみとながれん

花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして

あしたの空そらに出でざれば

などしるらめや明星の

光の色のくれなるを

朝うしほの潮と身をなして

流れて海に出でざれば

などしるらめや明星の

清すみて哀かなしききらめきを

なにかこひしきあかほし暁星の

空むなしき天あまの戸を出でて

深くも遠きほとりより

人の世きた近く来るとは

潮うしほの朝のあさみどり

水<sup>みな</sup>底<sup>そこ</sup>深<sup>ふか</sup>き白石<sup>しろいし</sup>を

星<sup>ほし</sup>の光<sup>ひかり</sup>に透<sup>す</sup>かし見て

朝<sup>あさ</sup>の齡<sup>よはひ</sup>を数<sup>かず</sup>ふべし

野<sup>の</sup>の鳥<sup>とり</sup>ぞ啼<sup>な</sup>く山<sup>やま</sup>河<sup>かは</sup>も

ゆふべの夢<sup>ゆめ</sup>をさめいでて

細<sup>こ</sup>く棚<sup>たなび</sup>引<sup>ひ</sup>くしのゝめの

姿<sup>すがた</sup>をうつす朝<sup>あさ</sup>ぼらけ

小<sup>こ</sup>夜<sup>よ</sup>には小<sup>こ</sup>夜<sup>よ</sup>のしらべあり

朝<sup>あさ</sup>には朝<sup>あさ</sup>の音<sup>ね</sup>もあれど

星の光の糸の緒をに

あしたの琴ことしづかは静なり

まだうら若き朝の空

きらめきわたる星のうち

いとく若き光をば

名なづけましかば明星と

潮音

わきてながるゝ

やほじほの

そこにいぎよふ

うみの琴

しらべもふかし

もゝかはの

よろづのなみを

よびあつめ

ときみちくれば

うらゝかに

とほくきこゆる

はるのしほのね

酔歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば

酔たもとふて袂うたぐさの歌草を

醒さめての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間まに

楽しき春は老いやすし

誰たが身にもてる宝たからぞや

君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉には憂愁あり

堅く結べるその口に

それ声も無きなげきあり

名もなき道を説くなかれ

名もなき旅を行くなかれ

甲斐なきことをなげくより

来りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の

独りさみしきものぐるひ

悲しき味の世の智慧に

老いにけらしな旅人よ

心の春の燭ともしび火に

若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば

哀かなしからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く

君の行衛ゆくへはいづこぞや

ことはなさけ琴花酒のあるものを

とゞまりたまへ旅人よ

二つの声

朝

たれか聞くらん朝ねむりの声

眠ねむりと夢を破りいで

彩あやなす雲にうちのりて

よろづの鳥に歌はれつ

天のかなたにあらはれて

東の空に光あり

そこに時ときあり始はじめあり

そこに道あり力あり

そこに色あり詞ことばあり

そこに声あり命あり

そこに名ありとうたひつゝ

みそらにあがり地にかけり

のこんの星ともろともに

光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮の声

霞つばさの翼雲の帯

煙ころもの衣露そでの袖

つかれてなやむあらそひを

闇のあなたに投げ入れて

夜つかひの使かはほりの蝙蝠の

飛ぶ間も声のをやみなく

こゝに影あり迷ありまよひ

こゝに夢あり眠ありねむり

こゝに闇あり休息ありやすみ

こゝに永ながきあり遠きあり

こゝに死ありとうたひつゝ

草木にいこひ野にあゆみ

かなたに落つる日とともに

色なき闇に暮ぞ隠るゝ

哀歌

## 中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴台旧譜壚前柳、風流銷尽二千年』、これ中野逍遙が秋しゅうえんじゅうぜつ怨じゅうぜつ十絶の一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、予州宇和島の人なりといふ。文科大学の異材なりしが年僅わづかに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の余睡にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、『寄語残月休長嘆、我輩亦是艷生涯』、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

## 思君九首

## 中野逍遙

思君我心傷

思君我容瘁

中夜坐松蔭

露華多似淚

思君我心悄

思君我腸裂

昨夜涕淚流

今朝尽成血

示君錦字詩

寄君鴻文冊

忽覺筆端香

窗外梅花白

為君調綺羅

為君築金屋

中有鴛鴦圖

長春夢百祿

贈君名香篋

忝記韓壽恩

休將秋扇掩

明月照眉痕

贈君雙臂環

寶玉值千金

一鐫不乖約

一題勿變心

訪君過台下

清宵琴響搖

佇門不敢入

恐亂月前調

千里囀金鶯

春風吹綠野

忽発頭屋桃

似君三両朶

嬌影三分月

芳花一朶梅

渾把花月秀

作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く

水になき名をしるすとして

今はた残る歌反古うたほごの

ながき愁うれひをいかにせむ

かなしいかなやする墨すみの

いろに染めてし花の木の  
君がしらべの歌の音に  
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前さきの世は  
みそらにかゝる星の身の  
人の命のあさぼらけ  
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に  
生れいでたる身を持ちて

友の契ちぎりも結ばずに

君は早くもゆけるかな

すゞしきまなこ眼つゆを帯び

葡萄ぶどうのたまとまがふまで

その面影をつたへては

あまりに妬ねたき姿かな

同じ時世ときよに生れきて

同じいのちのあさぼらけ

君からくれなるの花は散り

われ命あり 八重やへむぐら重むぐら葎ら

かなしいかなやうるはしく  
さきそめにける花を見よ  
いかなればかくとゞまらで  
待たで散るらんさける間まも  
かなしいかなやうるはしき  
なさけもこひの花を見よ  
いとく清きそのこひは  
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花

君しこひとにあらねども

いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に

あまりに惜しきさえ才なれば

やまひちりかなしみ  
病に塵に悲に

死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの

ことばの海のみなれ棹さを

磯にくだくる高潮たかじほの

うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の

きづなも捨てて嘶いななけば

つきせぬ草に秋は来て

声も悲しき天の馬

かなしいかなや音ねを遠み

流るゝ水の岸にさく

ひとつの花に照らされて  
ひるがへ  
飄り行く一葉舟  
ひとはぶね

四 深林の逍遙しやうよう、其他

深林の逍遙

力を刻むきざ木匠こだくみの

うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻くさばなほりものの

鑿のみの韻にほひもとゞめじな

いろさま／＼の春の葉に

あをひとふで あと  
青一筆の痕もなく

ちえ  
千枝にわかるゝ赤樟も  
あかくす

おのづからなるすがたのみ

ひのき  
檜は荒し杉直し

五葉は黒し椎しひの木の

枝をまじゆる白檜しろかしや

あふち  
樗は茎をよこたへて

枝と枝ともゆる火の

なかにやさしき若楓わかかへで

やまびこ  
山精

ひとにしられぬ

たのしみの

ふかきはやしを

たれかする

ひとにしられぬ

はるのひの

かすみのおくを

たれかする

こだま  
木精

はなのむらさき

はのみどり

うらわかぐさの

のべのいと

たくみをつくす

おほはた  
大機の

をさし  
梭のはやしに

きたれかし

## 山精

かのもえいづる

くさをふみ

かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき

はなにゑひ

はるのおもひの

なからずや

木精

ふるきころもを

ぬぎすてて

はるのかすみを

まとへかし

なくうぐひすの

ねにいでて

ふかきはやしに

うたへかし

あゆめば蘭らんの花を踏み

ゆけば楊やまもも梅袖に散り

袂たもとにまとふ山やまくづ葛の

葛のうら葉をかへしては

女蘿ひかげの蔭のやまいちご

色よき実こそ落ちにけれ

岡やまつゞき隈くまぐま々も

いとなだらかに行き延のびて

ふかきはやしの谷あひに

乱れてにほふふぢばかま

谷に花さき谷にちり

人にしられず朽くつるめり

せまりて暗き峽はごまより

やゝひらけたる深山木みやまぎの

春は小枝こえだのたゝずまひ

しげりて広き熊笹の

葉末をふかくかきわけて

谷のかなたにきて見れば

いづくに行くか滝川よ

声もさびしや白糸の

青き巖いはほに流れ落ち

若き猿ましらのためにだに

音をとゞむる時ぞなき  
おと

山精

ゆふぐれかよふ

たびびとの

むねのおもひを

たれかする

友にもあらぬ

やまかはの

はるのこゝろを

たれかしる

木精

夜をなきあかす

かなしみの

まくらにつたふ

なみだこそ

ふかきはやしの  
たにかげの  
そこにながるゝ  
しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ  
たびごとに

妻こふこひに

かへるなり

のやまは枯るゝ

たびごとに

ちとせのはるに

かへるなり

木精

ふるきおちばを

やはらかき

青葉のかけに

葬れよ

ふゆのゆめぢを

さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山みやまかせ

春はしづかに吹きかよふ

林しやうねの簫しょうねの音をきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬしろたへ白妙しろたへの

雲はそでの羽袖はそでの深山木の

千枝ちえだにかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹きぎ々をわたりて行く雲の

しばしと見ればあともなき

高ゆくへき行衛ゆくへにいぎなはれ

千々にめぐれるいはかげ巖影いはかげの

花にも迷ひ石よに倚り

流るゝ水の音をきけば

山は危けづふく石わかれ

削りてなせる青あをいは巖いはに

砕けて落つる飛たきみづ潭づの

湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の

光ひかり燭照りそふ水けぶり

独り苔こけむす岩よを攀よぢ

ふるふあゆみをふみしめて

浮べる雲をうかゞへば

下にとゞろく飛たきみづ潭づの

澄むいとまなき岩波は  
落ちていづくに下るらん

山精

なにをいざよふ

むらさきの

ふかきはやしの

はるがすみ

なにかこひしき

いはかげを

ながれていづる

いづみがは

木精

かくれてうたふ

野の山の

こゑなきこゑを

きくやきみ

つゝむにあまる  
はなかげの  
水のしらべを  
しるやきみ

山精

あゝながれつゝ  
こがれつゝ  
うつりゆきつゝ  
うごきつゝ

あゝめぐりつゝ

かへりつゝ

うちわらひつゝ

むせびつゝ

木精

いまひのひかり

はるがすみ

いまはなぐもり

はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

ゆびをりくればいつたびも

かはれる雲をながむるに

白きは黄なりなにをかも

もつ筆にせむ色彩いろあやの

いつしか淡く茶を帯びて

雲くれなるとかはりけり

あゝゆふまぐれわれひとり

たどる林もひらけきて

いと静かなる湖の

岸辺にさける花躑躅

はなつづじ

うき雲ゆけばかげ見えて

水に沈める春の日や

それ紅の色染めて

くれなゐ

雲紫となりぬれば

むらさき

かげさへあかき水鳥の

春のみづうみ岸の草

深き林や花つゝじ

迷ふひとりわがみだに

ふかむらさきくれなる

深紫の紅の

あや彩にうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに

きゞくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

しげくして

おもからずやは

そのしるし

いつかねむりを

さめいでて

いつかへりこん

わがはゝよ

あから  
紅羅ひく子も

ますらをも

みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ

ことなかれ

あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさき

はなちりて

きみがはかばに

かゝるとも

なつはみだるゝ

ほたるびの

きみがはかばに

とべるとも

あきはさみしき

あきさめの

きみがはかばに

そぐとも

ふゆはましろに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

ゆめまくら

おそるゝなかれ

わがはゝよ

合唱

一 暗香あんこう

はるのよはひかりはかりとおもひしを

しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの

をしければ

やみにも春の

香かに酔はん

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

## 妹

そらも葱へりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのしろく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるき

はるのよの

やみをおそるゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香<sup>か</sup>なりせば

いづれかよるに

にほはまし

姉

こぞのこよひは

わがともの

うすこうばいの

そめぐろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

きねがは  
木下川に

うれひしづみし

よなりけり

姉

こぞのこよひは

わがともの

おもひははるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごころ

ふるればいとゞ

やはらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

しりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし

はるのよを

二

蓮れんげぶね花舟

しはくもこほるゝつゆははちすはの

うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな

はすのはな

かげはみえけり

いけみづに

ひとつのふねに

さをさして

うきはをわけて

こぎいでん

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもしろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづしづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

葉にすれてゆく

みなれぎを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

姉

はすは  
荷葉にうたひ

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなと

いづれうるはし

いづれやさしき

三 葡萄ぶどうの樹きのかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ

ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに

あきはいりひの

てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき

姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはしづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

妹

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにしかじ

ひとふきの

われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをしれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかげのたまに

てはふれて

わがさしぐしの

おちにけるかな

四 高たか楼どの

わかれゆくひとををしむとこよひより

とほきゆめちにわれやまとはん

## 妹

とほきわかれに

たへかねて

このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ

わがあねよ

たびのころもを

とゝのへよ

姉

わかれといへば

むかしより

このひとのよの

つねなるを

ながるゝみづを

ながむれば

ゆめはづかしき

なみだかな

妹

したへるひとの

もとにゆく

きみのうへこそ

たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば

なにをひかりの

わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ

ねにつけわれを

おもへかし

けふわかれては

いつかまた

あひみるまでの

いのちかも

妹

きみがさやけき

めのいろも

きみくれなるの

くちびるも

きみがみどりの

くろかみも

またいつかみん

このわかれ

姉

なれがやさしき

なぐさめも

なれがたのしき

うたごゑも

なれがこゝろの

ことのねも

またいつきかん

このわかれ

妹

きみのゆくべき

やまかはは

おつるなみだに

みえわかず

そでのしぐれの

ふゆのひに

きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはん

をさ  
梭の音ね

梭の音を聞くべき人は今いづこ

心を糸により初<sup>そ</sup>めて

涙ににじむ木綿<sup>もめん</sup>縞

やぶれし窓<sup>まど</sup>に身をなげて

暮れ行く空をながむれば

ねぐらに急ぐ村<sup>むらがらす</sup> 鴉

連<sup>つれ</sup>にはなれて飛ぶ一羽

あとを慕ふてかあくと

かもめ

波に生れて波に死ぬ

なさけ

情の海のかもめどり

おほなみ

恋の激浪たちさわぎ

夢むすぶべきひまもなし

くろうしほ

闇き潮の驚きて

流れて帰るわだつみの

ゆくへ

鳥の行衛も見えわかぬ

波にうきねのかもめどり

## 流星

門にたち出でたゞひとり<sup>かど</sup>  
人待ち顔のさみしさに  
ゆふべの空をながむれば  
雲の宿りも捨てはてて  
何かこひしき人の世に  
流れて落つる星一つ

君と遊ばん

君と遊ばん夏の夜の

青葉の影の下すゞみ

短かき夢は結ばずも

せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる

昼の愁<sup>うれ</sup>ひはたえずとも

星の光をかぞへ見よ

楽<sup>たのし</sup>みのかず夜<sup>よ</sup>は尽きじ

夢かうつゝか天<sup>あま</sup>の川<sup>がは</sup>

星に仮寝の織姫の

ひゞきもすみてこひわたる  
梭をさの遠音とほねを聞かめやも

昼の夢

花はな橘たちばなの袖そでの香かの

みめうるはしきをとめごは

真昼まひるに夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

白日まひるの夢のなぞもかく

忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに  
さめざらましを世に出いでて  
うらわかぐさのうらわかみ  
何をか夢の名残ぞと

問はゞ答へん目さめては  
熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば

つよくもくさをふくかぜか  
もとよりかぜのみにしあれば  
きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば

かぜにふかるゝくさなれや

もとよりくさのみにしあれば

きのふは南けふは北

懐古

あま かはら  
 天の河原にやほよろづ

ちよろづ神のかんつどひ

はじめ  
 つどひいませしあめつちの  
 始のときを誰か知る

おほがみ あまぐも  
 それ大神の天雲の

八重かきわけて行くごとく

な あづまぢ  
 野の鳥ぞ啼く東路の

うすひ  
 碓氷の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき

吾妻はやとこひなきて

熱き涙をそゝぎてし

尊みことの夢は跡も無し

大和やまとの国の高市たかいちの

雷いかづち山やまに御幸みゆきして

天雲あまぐものへにいほりせる

御輦くるまのひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や

志賀の都は荒れにしと

むかしを思ふ歌うたひと人の  
澄める怨うらみをなにかせん

春は霞かすめる高台たかどのに

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重ここのへの

大宮内のももしびや

さむさは雪に凍る夜の

竜たつのころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ

人の血潮ちしほの流るとも

今はむなしきわだつみの

まんくとしてきはみなし

むかしはひろき関が原

つるぎに夢を争へど

今は寂さびしき草のみぞ

ばうくとしてはてもなき

われいま今秋の野にいでて

おくやま奥山

高くのぼり行き

都のかたを眺むれば

あゝあゝ熱きなみだかな

しらかべ白壁

たれかしるらん花ちかき

たかどの高

楼われはのぼりゆき

みだれて熱きくるしみを

うつしいでけり白壁に

唾つばにしるせし文字なれば

ひとしれずこそ乾きけれ

あゝあゝ白き白壁に

わがうれひありなみだあり

四つの袖そで

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの  
霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌ひらの

お夏の手にも触るゝとき

をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの

お夏の胸に映るとき

をとこの紅あかき口唇くちびるの

お夏の口にもゆるるとき

人こそしらね鳴呼あ恋あの

ふたりの身より流れいで

げにこがるれど慕へども

やむときもなき清十郎

天馬

序

老おいは若わかは越かきしかたに

文ふみに照あらせどまれらなる

奇くしきためしは箱根山

弥やよひ生の末のゆふまぐれ

南あまの天との戸をいでて

よなく北の宿に行く

血くの深れな紅あの星の影

かたくななりし男さへ

星の光を眼に見ては

身にふりかゝる凶まがごと禍との

天しるしの兆とうたがへり

総そうなき鳴うぐひすに鳴く鶯うぐひすの

にほひいでたる声をあげ

さへづり狂ねふ音をきけば

げにめづらしき春の歌

春を得知らぬ処をとめ女さへ

かのうぐひすのひところゑに

枕の紙のしめりきて

人なつかしきおもひあり

まだ時ならぬ白百合の

籬まがきの陰まがきにさける見て

つくもおきなの翁おきなうつし世の

こゝろの慾の夢を恋ひ

音をだにきかぬひなづる雛鶴の

軒のきの榎樹えのきに来て鳴けば

寢覚ねぞめの老嫗おうな後の世の

花の台うてなに泣きまどふ

空にかゝれる星のいろ

春さきかへるなつはな夏花や

是これわぎはひにあらずして

よしや兆しるしといへるあり

なにを酔ひ鳴くはるどり春鳥よ

なにを告げくる鶴の声

それ鳥の音ねにうらなトひて

よろこびありと祝ふあり

高きひじり聖のこの村に

声をあげさせたまふらん

世を傾けむ麗人よきひとの

茂れる賤しづの春草はるぐさに

いでたまふかとのゝしれど

誰かするらん新星にひぼしの

まことの北をさししめし

さみしき蘆あしみづみの湖の

沈める水に映うつるとき

名もなき賤の片びさし

春の夜風の音を絶え

村の南のかたほとり

その夜生れし牝めの馬は

流るゝ水の藍あゐぞめ染の

青毛あをげやさしき姿なり

北に生れし雄をの馬の

栗毛にまじる紫は

色あけぼのの春霞

光をまとふ風情ふせいあり

星のひかりもをさまりて

うはさ  
樽に残る鶴の音や

啼く鶯に花ちれば

嗚呼この村に生れてし

馬のありとや問ふ人もなし

をうま  
雄馬

あな天あまぐも雲にともなはれ

緑の髪をうちふるひ

雄馬は人にしたが随ひて

箱根みねの嶺くだを下りけり

胸は踴りて八百潮の

かの蒼溟わだつみに湧くごとく

喉のどはよせくる春濤はるなみを

飲めども渴かわく風情あり

目はひさかたの朝の星

睫毛まつげは草の浅あさみどり緑

うるほひ光る眼瞳ひとみには

千里ちさとの外もほがらにて

東に照らし西に入る

天つみそらを渡る日の

朝日夕日の行衛ゆくへさへ

雲の絶間に極むらん

二つの耳をたとふれば

いと幽かすかなる朝風に

そよげる草の葉のごとく

蹄ひづめの音をたとふれば

紫金しこんの色のやきがねを

高くも叩たたく響あり

狂へば長たてがみき鬣がみの

うちふりうちふる乱れ髪

燃えてはめぐる血の潮しほの

流れて躡をどる春の海

噴く紅はくれなるの光には

火炎ほのほの氣息いきもあらだちて

深くも遠き嘶いななき声は

大神おほがみの住む梁うつばりの

塵ちりを動かす力あり

あゝ朝鳥あさとりの音をきゝて

富士の高根の雪に鳴き

夕つげわたる鳥の音に

木曾みたけの御嶽いはの巖を越え

かの青雲あをぐもに嘶いななききて

天そらより天そらの電いなづま影まの

光の末に隠るべき

雄馬の身にてありながら

なさけもあつくなつかしき

あるじ主人のあとをとめくれば

箱根も遠し三井寺や

日もあたたか暖に花深く

さゝなみ青き湖の

岸の此こちこち彼草を行く

天の雄馬のすがたをば

誰かは思ひ誰か知る

しらずや人の天あまぐも雲に

歩むためしはあるものを

天馬おの下りて大土おほつちに

歩むためしのなからめや

見よ藤の葉の影深く

岸の若草香かにいでて

春花に酔ちようふ蝶ちようの夢

そのかげを履ふむ雄馬には

一つの紅あかき春花はるはなに

見えざる神やどりの宿やどりあり

一つうつろふ野の色に

つきせぬ天のうれひあり

嗚呼わしたか 鷹たかの飛ぶ道に

高く懸かかれる大空の

無限むげんの絃つるに触れて鳴り

をがみめがみをがみめがみ たはむたはむ  
男神女神に戯れて

照る日の影の雲に鳴き

空に流るゝ満潮みちしほを

飲みつくすとも渴かわくべき

天馬なまよ汝なれが身を持ちちて

鳥なのきて啼なく鳩にほの海

花はな 橘たちばなの蔭ふを履む

その姿こそ雄々しけれ

牝馬めうま

青あをなみ波深きみづうみの

岸のほとりに生れてし

天の牝馬あづまは東なる

かの陸奥みちのくの野に住めり

霞うるほに露うるほひ風に擦すれ

音おともわびしき枯くさの

すゝき尾花にまねかれて

荒野あれのに嘆く牝馬かな

誰か燕つばめの声を聞き

たのしきうたを耳にして

日も暖かに花深き

西も空をば慕はざる

誰か秋鳴くかりがねの

かなしき歌に耳たてて

ふるさとさむき遠とほぞら天の

雲ゆくへの行衛を慕はざる

白き羚羊ひつじに見まほしく

透すきては深く柔やはらか軟かき

眼まなこの色いろのうるほひは

吾わが古里ふるさとを忍しのべばか

蹄ひづめも薄うすく肩かた瘦やせて

四よつあしの脚あしさへ細こりゆき

そたてがみつやの鬣はげの艶つやなきは

荒野あれのの空そらに嘆なげけばか

春はるは名取なとりの若草わかしらや

病やまめる力ちからに石いしを引ひき

夏なつは国分こくぶんの嶺みねを越こえ

牝馬めうまにあまる塩しほを負おふ

秋あきは広瀬ひろせの川がわ添そひの

紅葉もみぢの蔭かげにむちうたれ

冬は野末に日も暮れて

みぞれの道の泥に饑うゆ

鶴よみそらの雲に飽き

朝の霞の香に酔ひて

春の光の空を飛ぶ

羽つばさ翼の色の嫉ねたきかな

獅しし子よさみしき野に隠れ

道なき森に驚きて

あけぼの露にふみ迷ふ

鋭き爪のこひしやな

鹿あきやまよ秋山妻つまご恋こひに

黄葉もみぢのかげを踏みわけて

谷間の水に喘あへぎよる

眼睛ひとみの色のやさしやな

人をつめたくあぢきなく

思ひとりしは幾いくとせ歳か

命を薄くあさましく

思そひ初めしは身を責むる

強くびきき軛わに嘆き侘び

花に涙をそゞぐより

悲しいかなや春の野に

湧わける泉を飲み干すも

天の牝馬のかぎりなき

渴ける口をなにかせむ

悲しいかなや行く水の

岸の柳の樹の蔭の

かの新草にひぐさの多くとも

饑ゑたる喉のどをいかにせむ

身は塵埃ちりひぢの八重葎やへむぐら

しげれる宿にうまるれど

かなしや地つちの青草は

その慰藉なぐさめにあらじかし

あゝ天あまぐも雲や天雲や

塵ちりの是世このよにこれやこの

轡くつわも折れよ世も捨てよ

狂くびきひもいでよ軛くびきさへ

噛み砕けとぞ祈るなる

牝馬あはれのこゝろ哀なり

尽きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや

渴かぬ水の湧くといふ

天の泉のなつかしや

せまき厩うまやを捨てはてて

空を行くべき馬の身の

心ばかりははやれども

病みては零おつる泪なみだのみ

草に生れて草に泣く

姿やさしき天の馬

うき世のものにことならで

消ゆる命のもろきかな

散りてはかなき柳やなぎは葉の

そのすがたにも似たりけり

波に消え行く淡あはゆき雪の

そのすがたにも似たりけり

げに世の常の馬ならば

かくばかりなるかなしみ悲嘆に

身の苦悶わづらひを恨み侘うらび

声ふりあげていなな嘶かん

乱れて長き鬣の

この世かの世の別れにも

心ばかりは静和しづかなる

深く悲しき声きけば

あゝ幽遠かすかなるためいき氣息に

天のうれひを紫の

野末の花に吹き残す

世の名残こそはかなけれ

にはとり  
鶏

花によりそふ鶏の

つま めどり  
夫よ妻鳥よ燕子花 かきつばた

いづれあやめとわきがたく

さも似つかしき風情 ふぜいあり

姿やさしき牝鶏 めんどりの

かたちを恥づるこゝろして

花に隠るゝありさまに

品かはりたる夫鳥つまどりや

雄々しくたけき雄鷄をんどりの

とさかの色も艶えんにして

黄なる口觜くちばし脚蹴爪あしけづめ

尾はしだり尾のながくし

問ふても見まし誰たがために

よそほひありく夫鳥つまどりよ

妻守つまもるためのかざりにと

いひたげなるぞいぢらしき

画にこそかけれはなどり花鳥の

それにも通ふ一つがひ

霜に侘わび寝ねの朝ぼらけ

雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき

日を迎へんと鶏の

よる夜の使つかひを音ねにぞ鳴く

露けき朝の明けて行く  
空のながめを誰か知る  
燃ゆるがごとき紅の  
雲のゆくへを誰か知る

闇もこれより隣なる

声ふりあげて鳴くときは  
ひとの長眠のみなめざめ  
夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに

いざ妻鳥つまどりと巢いを出でて  
餌えをあさらんと野に行けば  
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏とりの音ねも高に

あしたの空に鳴き渡り

草かき分けて来るはなぞ

妻恋つまどりふらしや妻鳥つまどりを

ねたしや露に羽はねぬれて

朝日にうつる影見れば

雄鷄をどりに惜をしき白妙しろたへの

雲をあざむくばかりなり

力あるらし声たけき

敵かたきのさまを懼おそれてか

声色いろあるさまに羞はぢてかや

妻鳥めどりは花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて

背をや高めし夫鳥つまどりは

羽はがきも荒く飛び走り

蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛ふでげのさきも逆立さかだちて

血潮ちしほにまじる眼のひかり

二つの鶏とりのすがたこそ

是これおそろしき風情ふぜいなれ

妻鳥めどりは花を馳かけ出でて

争あらし闘そひ分くるひまもなみ

たがひに蹴合けつめふ蹴爪には

火焰ほのほもちるとうたがはる

蹴るや左眼さがんの的まとのそれて  
 羽はねに血しほの夫つまどり鳥は  
 敵うがんの右眼をめぐしつゝ  
 爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなるの  
 血潮の花も地に染みて  
 二つの鶏とりの目もくるひ  
 たがひにひるむ風情なし

そこに声あり涙あり

争ひ狂ふ四つの羽はね

のり  
血潮に滑りし夫鳥つまどりの

あな仆たふれけん声高し

一声長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥の

羽はねに血潮の朱あけに染そみ

あたりにさける花あか紅し

あゝあゝ熱き涙かな

あるに甲斐なき妻鳥は

せめて一声鳴けかしと

<sup>かばね</sup>屍に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖<sup>おそれ</sup>と変りきて

思ひ乱れて音<sup>ね</sup>をのみぞ

鳴くや妻鳥<sup>めどり</sup>の心なく

我を恋ふらし音<sup>ね</sup>にたてて

姿も色もなつかしき

花のかたちと思ひきや

かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶あるを  
ちよう

鳥に縁えにしのなからめや

おそろしきかな其の心

なつかしきかな其の情なさけ

紅あけに染そみたる草見れば

鳥の命のもろきかな

火よりも燃ゆる恋見れば

敵てきのこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の

照る日も雲に薄らぎて

花に色なく風吹けば

野はさびしくも変りけり

かなしこひしの夫つまどり鳥の

冷えまさりゆく其その姿

たよりと思ふ一ふしの

いづれ妻めどり鳥の身の末ぞ

恐<sup>おそれ</sup>怖を抱く母と子が

よりそふごとくかの敵に

なにとはなしに身をよする

妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな

さきの樂しき花ちりて

空色暗く一彩毛<sup>ひとはげ</sup>の

雲にかなしき野のけしき

生きてかへらぬ鳥はいざ

つま めどり 夫か妻鳥か かきつばた 燕子花

いづれあやめを踏み分けて

野末を帰る二羽の鶏 とり

松島 ずいがんじ 瑞巖寺に遊び ぶどう 葡萄

きね ずみ 栗鼠の木彫を観て

ふ なぢ 舟路も遠し ずいがんじ 瑞巖寺

ふ ゆじ 冬逍遙のこゝろなく

古き扉に身をよせて

飛驒ひだの名匠たくみの浮彫うきぼりの

葡萄ぶどうのかげにきて見れば

菩提ぼだいの寺の冬の日に

刀かた悲かなしみ鑿のみ愁うれふ

ほられて薄き葡萄葉の

影にかくるゝ栗鼠よ

姿ばかりは隠すとも

かくすよしなし鑿のみの香かは

うしほにひゞく磯いそ寺でらの

かねにこの日の暮るゝとも

夕ゆふ闇やみかけてたゝずめば

こひしきやなぞ甚五郎



# 青空文庫情報

底本：「藤村詩集」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年2月10日発行

1997（平成9）年10月15日55刷

※ルビの一部を新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：佐野女子高等学校2-1（H11）

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 若菜集

島崎藤村

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>